

確信と主張および否定判断と問いの関係性
-図書館およびレファレンス質問生成機構の基底に関する考察-

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 明治大学図書館情報学研究会 公開日: 2021-01-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤, 泰則 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10291/21360 |

＜論文＞

確信と主張および否定判断と問いの関係性 —図書館およびレファレンス質問生成機構の基底に関する考察—

齋藤 泰則

哲学者の中井正一がその著作『委員会の論理』で取り上げた「確信と主張」に関する議論にもとづき、図書とは著者が確信した内容について他者の承認を求めて主張したものであり、図書館はそうした承認を保証する社会的機構であることを示した。さらに、ヴィンデルバントの否定判断論に依拠し、し、利用者のレファレンス質問は否定判断にもとづいて生成される問いであることを示した。また、ヴィンデルバントの肯定・否定判断における無関心点の概念に依拠し、利用者のレファレンス質問の提示から図書館員による回答の提供にいたる機構の基底について考察した。

はじめに

中井正一はその著作『委員会の論理』¹⁾において思惟・確信と主張に関する考察を展開し、そのなかで否定判断と問いに関する興味深い枠組みを提示している。これらの考察と枠組みは図書館の社会的意義や図書館資料への要求の特殊性およびレファレンス質問の生成機構の基底を明らかにするうえできわめて有効なものである。

中井は、『美学入門』、『委員会の論理』などの著作で知られた哲学者であり、国立国会図書館が開館した1948年に副館長に就任し²⁾、図書館に関する論考も著している。それらの著作と論考を収録している『中井正一評論集』(岩波書店)の編者である長田弘は、「あとがき」のなかで、次のように述べている。

図書館は、戦後の世界に中井正一が見いだした、自ら理念にえがいた「委員会の論理」の現実の場になった。中井正一がもとめたのは、まずなによりも人びとにとって必要な、生きた概念としての図書館だ。のぞむべき図書館は、人びとのあいだのメディアム、媒介としての図書館だ。³⁾

長田が指摘するとおり、中井が提示した「委員会の論理」は図書館の成立機構を考察するうえできわめて示唆的である。中井の図書館論については、特にメディア論の観点から後藤嘉宏による体系的な研究⁴⁾や佐藤晋一による研究⁵⁾があげられる。

本稿では、中井が「委員会の論理」の成立機構となる「いわれる論理」において提示した確信と主張をめぐって展開した論考にもとづいて、図書館の社会的意義や図書館資料への要求の特殊性について考察する。さらに中井の確信と主張に関する論考のなかで登場する否定判断論を取り上げる。この否定判断論は人間が生成する問いの機構を解明するうえで重要な論点を提示したものであり、レファレンス質問の生成機構の基底を考察するうえで重要な枠組みを提供するものである。

そこで本稿ではまず、中井正一の「委員会の論理」の概要を示す。そのうえで、確信と主張との関係性を検討し、中井がその関係性を解明するうえで依拠したドイツの哲学者 W. ヴィンデルバント (W. Windelband) の「否定判断論」⁶⁾にもとづいてレファレンス質問の生成機構の基底について考察する。

1. 中井正一の「委員会の論理」の概要

中井は、古代文化から近代文化にいたる歴史について、それぞれの文化段階を特徴づける論理を、図1のとおり、「いわれる論理」、「書かれる論理」、「印刷さ

れる論理」としたうえで、近現代社会を特徴づける論理として、これら三つの論理から構成される「委員会の論理」というものを提示している⁷⁾。

古代文化を特徴づける「いわれる論理」とは討論に関する論理である。この論理は古代ギリシャにおいて弁論術が重視されたことに依拠して提示されている。中世文化を特徴づける「書かれる論理」は、中世時代にはじまった羊皮紙に書くことのもつ意義から提示されている。そして近代文化を特徴づける「印刷される論理」は、いうまでもなく、グーテンベルクの印刷術がもたらした革命的な影響と公衆性の出現から提示されたものである。

ここで注意すべきことは、古代文化を特徴づける「いわれる論理」は中世文化を特徴づける「書かれる論理」に受け継がれ、その「書かれる論理」は近代文化を特徴づける「印刷される論理」に受け継がれたということである。そして、中井はこれらの論理を総合し、現代社会を特徴づける論理として「委員会の論理」を構想したのである。

馬場俊明は、中井が「委員会の論理」を構想した背景について、“中井は迫りくるファシズムの非合理性にたいし、「無批判と無共同性」の大衆の「精神の機械化」を救うには、「委員会の論理」で対抗することを提案したのである⁸⁾”と指摘している。中井の「委員会の論理」の論文中には、そうした緊迫する時代背景を明示する記述は見られないものの、「委員会の論理」の論文が発表された 1936 年という時代を考えると、馬場が指摘する背景をふまえて「委員会の論理」が構想されたことは注目すべきである。

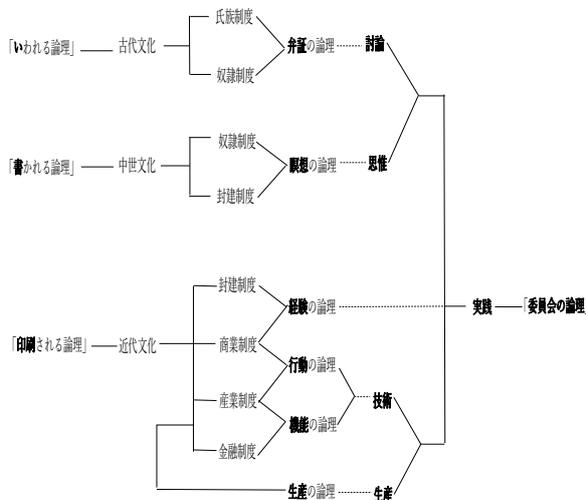


図1 中井正一の「委員会の論理」の図式
(出典：中井正一、「委員会の論理」久野収編『中井正

一全集 1』美術出版, 1981, p.91)

現代社会の論理として中井がこの「委員会」に着目したのは、現代社会の組織が各種の委員会によって成立しているからである。資本主義社会である現代社会では、高度な科学技術と専門性に依拠して多種多様な商品が生産され、流通している。

現代社会において専門知識をもたない一般の消費者や市民は、もはや商品の成分や製造過程等を知ることなく商品を購入し、現代社会に不可欠な金融システムや情報システムの高度な仕組みを知ることなく、それらのシステムに依拠して生活し、活動している。

そうした商品の生産やシステムの構築は高度な専門知識を有する専門家からなる委員会に委ねられている。中井はそのような委員会を「工場の秘密委員会」と呼び、消費者にとって知ることのできない隠された委員会としている⁹⁾。一般消費者や市民はそうした委員会の権威や専門性を信頼して、商品を購入し、システムを利用している。中井が現代社会を特徴づける論理を「委員会の論理」としたのは、そうした背景にもとづいている。

中井が「委員会の論理」を執筆した 1930 年代には、今日のような高度な金融システムや情報システムは存在しなかったが、そうしたシステムの開発と運用は、その名称はともかく、専門家集団からなる委員会組織が担っている。中井の執筆当時の状況に比べ、より一層、専門家集団からなる委員会に依存する程度が高まっているのが現代社会である。

今日の図書館も、専門性を有する各種の委員会から組織されている。図書館利用者はそうした委員会によって構築された図書館資料の組織化の技術的詳細や利用者サービスを成り立たせている仕組みについて知ることなく、図書館を利用し、要求をみだしている。

本稿では、この「委員会の論理」の成立機構の基礎として中井が注目し詳細に考察を加えている「確信」と「主張」、そしてその確信と主張に深く関わるヴァインデルバントの「否定判断」と「問い」について取り上げる。これらは、現代社会における図書館の意義や図書館資料への要求の特殊性、とりわけレファレンス質問の生成機構の基底を解明するうえで重要な視点と枠組みを提供するものである。

2. 確信と主張の関係性

本章では、中井が『委員会の論理』のなかで考察した「確信」と「主張」を取り上げ、それらが著者と読者・利

用者との関係性ならびに図書館の社会的意義を考察するうえで重要な概念となることを示す。

中井は、ドイツの哲学者 A. ライナッハ (A. Reinach) の論考¹⁰⁾を取り上げ、確信と主張の違いについて興味深い考察を展開している¹¹⁾。そこでまず、中井の説明に依拠しつつ、確信と主張の定義とその違いについて見ていきたい。

2.1 確信と主張の定義

「確信」とは、ある一人の人間における体験であり、その人間の主観の関係体験である。ここで注意すべきことは、確信とはあくまでも一人の人間の自我の内面で生じるものであり、他者との関係は生じていないということである。一人の人間がある特定の命題についてその内容を明確に理解する際には、図書や記事を参照することになる。この図書や記事は後述するように、他者の主張を記録したものであることから、命題の理解の際には他者が関与するものの、その理解にもとづいて命題を確信する段階は、一人の人間における体験であり、自我の内面で生じるものであって、他者が関与することはない。

それに対して、「主張」とは、特定の他者であれ、不特定の他者であれ、他者に対して行われるものである。そして、主張にあたって、主張する者は、他者に自らの主張内容について承認、是認することを求める。主張にあたって、他者に自らの主張内容の承認、是認を求めないような主張者はいない。このように他者の承認を求めることは主張する際の重要な要件となる。

中井は、この承認に関して、ライナッハが指摘した「判断的是認」と「同意的是認」の違いに注目している¹²⁾。判断的是認とは、ある個人が確認した内容をその個人自身が是認することを意味する。すなわち、自らが探究したある命題の内容について、真であると判断することである。この確信と判断的是認を研究者にあてはめれば、研究者は研究をとおして得られた成果や考察の内容の真偽を評価し、その内容の正しさや妥当性を判断し、確信を得て自らの成果を是認する。ここで注意すべきことは、この研究者の判断的是認は、あくまでもその研究者の内部、主観におけるものであり、「確信」の領域に限られるということである。

それに対して、同意的是認は、ある個人の主張に対して他者が与えるものであり、他者との関係がそこに介在してくることになる。ゆえに、この同意的是認は判断的是認の是認といえる¹³⁾。つまり、同意的是認とは、「主張」の領域において生じるものであり、ある個人の

主張に対して他者が与えるものである。

再び研究者の例をあげるならば、主張とは、研究者が研究成果を論文や図書としてまとめ発表することにあたり、その論文や図書を読んだ研究者が、その論文や図書において主張されている内容に同意することが、同意的是認にあたる。

ここで注意すべき重要なことは、判断的是認の内容、すなわち確信した内容と、その判断的是認の是認をもとめて主張された内容とが常に一致するわけではない、ということである。これはやや奇異に思えるが、判断的是認の内容がそのまま主張され、判断的是認の是認、すなわち同意的是認が求められるわけではないのである。再び研究者の例をあげるならば、研究者が研究をとおして確信した成果の内容(判断的是認の内容)と、その成果をふまえて書かれたはずの論文や図書の内容(判断的是認の是認、すなわち同意的是認の内容)とは区別して考える必要がある、ということである。中井がこの区別を明らかにするために設定した概念が「嘘言の構造」である。中井は次のように述べている。

内的確信において肯定せるものを、外的主張で否定でもって承認を求める場合、あるいは内的確信において否定せるものを、外的主張で肯定をもって承認を求める場合、そのいずれにもせよ、それは嘘言を構成する。しかし、厳密にいわしむれば、いずれの言か嘘言ならざるといいたいほど、日常および公的生活は、嘘言に充ちている。¹⁴⁾

自らが確信していることが、「主張」という他者との関係性が生じる場面においては、そのまま主張されない、あるいは歪められる場合がある、ということである。中井が例としてあげているのが、有名なガリレイの独語である。地球が太陽を廻ることを観察によって確信したガリレイであるが、死を免れるために、その確信は主張されず、沈黙し、「しかし地球は廻る」とガリレイは独語したのである。研究者の例でいえば、自ら確信した理論やアイデアでありながら、他の研究者による承認を得ることは難しいと考え、審査で承認されるためにその理論やアイデアを修正、変更して記述するような場合がこれにあたるだろう。また、研究者が実験の結果得られたデータに確信をもてないにも関わらず、論文においてそのデータを改ざんし、掲載するような場合もあるだろう。

この中井の「嘘言の構造」について、後藤は利潤機構との関係で論じている¹⁵⁾。ここで利潤機構とは、主張

としての図書も出版物として市場経済の原理にしたがって売買されることを指す。研究者の著作も、現下の市場経済社会においては、多くの読者に購買されることが期待される。このより多くの読者による購買が虚言への誘惑を引き起すということである。この利潤機構と出版物との関係については、2.2 節で改めて取り上げるが、それではなにゆえ主張者としての著者はより多くの読者からの購買を期待するのであろうか。著者や研究者に限定することなく、より一般化するならば、なにゆえ、ある個人にとって、自らが確信した内容に関する他者の是認、承認がこれほどまでに求められるのであろうか。そこには、以下のヘーゲルの欲望論が示すように、人間にとって自らの存在意義は他者の承認によって成立するからである。

人間は自己の人間の欲望、すなわち他者の欲望に向かう自己の欲望を充足せしめるために自己の生命を危険に晒し、それによって自己が人間であることを「証明」する。[中略] 私は他者が私の価値を彼の価値として「承認する」ことを欲するのであり、私は彼が私を自立した一つの価値として「承認する」ことを欲すのである。換言すれば、人間の欲望、人間の生成をもたらす欲望、自己意識つまりは人間的実在性の生みの親としての欲望は、いかなるものであれ、終局的には、「承認」への欲望にもとづいている。¹⁶⁾

人間は、他者の承認を求めて、自らが確信した内容のみならず、確信しえなかった内容さえも主張する場合がある。それは、自己の主張が他者によって承認されてはじめて、自身の存在意義が生じるからである。それゆえ、中井が指摘するように、確信した内容がそのまま主張されるとは限らず、他者の承認が得られるかたちで修正して主張され、場合によっては、確信した内容とは異なる歪められた内容が主張されることにもなるのである。

2.2 確信と主張における図書館の位置づけ

ここでは、図書館の領域において、以上の確信と主張の議論がどのように関わるか見ていきたい。図書館が収集・組織・提供する図書や記事・論文等の資料は、著者によって「主張」されたものであることにまず着目する必要がある。図書の出版、記事・論文の発表はすべからず社会的な場における著者の主張である。図書や論文の内容が社会において承認されることを欲望して、著者は図書を執筆し、記事・論文を発表するので

ある。

では、確信と主張において図書館利用者はどのような位置づけになるであろうか。図書館利用者は、要求する主題に関する図書館資料の利用をとおして、他者である著者の主張を知ることにより、自らの思惟を形成し、ある主題に関する知識を得、確信する存在といえる。そして、その確信内容にもとづいて、自らの主張を構成するのが利用者である。思惟・確信と主張の領域における、こうした著者と利用者との関係は次のように図式化できる。

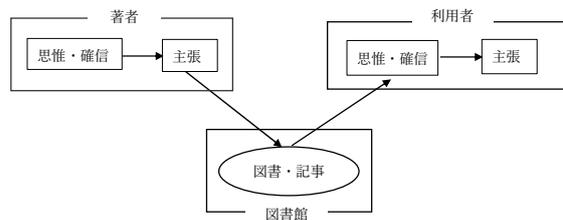


図2 確信と主張における著者と利用者との関係性

まず「図書・記事」が著者と利用者との間を直接、媒介していることに注意したい。そして、その媒介を著者と利用者との間で媒介しているのが図書館である。図書館とはこのように媒介の媒介機能を果たしているのである¹⁷⁾。もし社会において図書館が収集・組織・提供機能を発揮しなければ、著者から利用者への主張の伝達は十分に機能しないことになる。

ところで、この主張する側と主張を受け取る側との関係について、中井は「意味の質的方向」から「量的方向」への転化であるとして次のように述べている。

主張とは、ほかのあらゆる人々に一つの判断的是認の量的拡張を要求しているのである。換言すれば、**判断是認は意味の質的構成**であるとすれば、**同意的是認は意味の量的構成への転化**である。[中略]この転化の方向軸の機構が、確信と主張の二つの肯定の法則的なモデルであると考えたい。¹⁸⁾[強調文字は原文のまま]

主張する側の主張内容は、それが思惟・確信にとどまる段階では判断的是認、すなわち、思惟・確信する者による肯定的是認の対象である。この判断的是認は、思惟・確信の意味内容を定めるという点で、意味の質的構成といえる。

思惟・確信した内容が主張に移行するとき、今度は、その主張内容には受け取る側の承認が求められること

になる。その承認が、受け取る側である他者による主張者の判断的承認を承認することを意味するのは先に見たとおりである。ここで注意すべきことは、判断的承認の内容が歪められて主張される場合があるにせよ、判断的承認の内容と同意的承認の内容は基本的に同一であるという点である。その違いは何かといえば、先述のとおり、判断的承認が意味内容の質的構成であるのに対して、同意的承認とは、意味内容の量的構成に関わっている、ということである。つまり、多くの人々の承認が得られれば得られるほど、その主張内容は社会において広く受け入れられることになるがゆえに、主張は多くの人々からの承認を求めて行われる、ということである。

中井は、こうした確信から主張への意味構成の質から量への転化の抽象化、形式化の例として、試験の審査をあげている。すなわち、答案が一つの確信の判断的肯定であるのに対して、審査は一人または数人の同意的肯定であって、その同意は量的パーセンテージ、すなわち点数として換算されると述べている¹⁹⁾。今日の社会において、確信し主張された内容への同意的承認の量的転化がいかに重要かを的確に示した例といえる。さらには、出版活動についてもこのことがあてはまるとし、中井は次のように述べている。

現今におけるごとき利潤機構において、出版活動内における思想行動は、その同意的肯定の量の大众的徴表が、著書の購買となってあらわれいずる場合もある²⁰⁾。

読者による図書の購買が、直ちに著者の確信したことを主張した内容に対する同意的承認を意味するわけではないが、中井が指摘するように、購買数が多ければ多いほど、購買者である読者の同意的承認の量が確率的に高くなるのは事実である。購買した読者がその主張内容に同意する割合をいかに設定したとしても、100万部購入された図書と1万部購入された図書では、同意的承認数の比率は、その購買数の比率となる。

図書が図書館において収集・組織・提供される場合、その図書の同意的承認の量は、貸出件数によって算出することができる。その時、購買の場合と同様、図書の利用に占める同意的承認の比率をいかに設定しようと、貸出件数の比率がそのまま同意的承認の比率になる。すなわち、年間の貸出件数が100回の図書と10回の図書における利用者の同意的承認数の比率は10:1となる。

以上述べてきた、確信とその主張への判断的承認の承認に関する関係性を図書館の領域にあてはめるならば、図3のように図式化することができる。

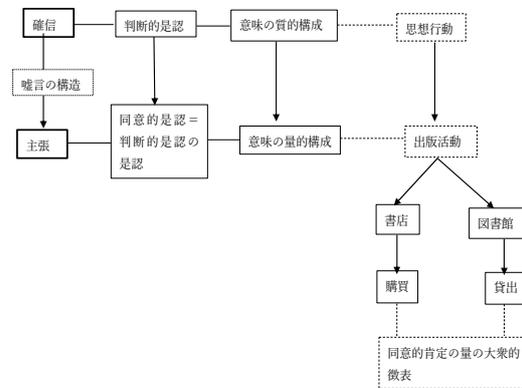


図3 著者の確信と主張から利用者への貸出までの過程

先述のとおり、著者によるある主題に関する思惟と確信は著者自身による判断的承認を表し、それは意味の質的構成にあたる。著作を執筆する際の目的が同意的承認の量を増加させることにあつたとするならば、著作の執筆は意味の量的構成を意図したものといえる。こうして図書あるいは記事・論文として出版された著作は、図書館または書店に受け入れられ、大衆としての読者による同意的承認を得る対象となる。

ここで、図書館と書店の違いに言及しておくことは有益であろう。書店を経由して著作の同意的承認を求める場合、読者による「購買」という行為がそこに必要となる。つまり、書店を経由する場合には、経済的能力が同意的承認の制約となる可能性がある、ということである。それに対して公共図書館においては、無料での資料提供、貸出サービスが行われている。この貸出サービスについては図書館員の専門性を要しないサービスとしてその意義を軽視する論調もあるが、それは大きな誤りである。貸出サービスは、著者の主張を反映した著作への同意的承認、意味の量的構成が読者あるいは利用者の経済的能力による制約を一切受けないことを保証するサービスである。こうした貸出サービスの意義はいくら強調しても強調しすぎることはない。図書館は、読者・利用者の経済能力の有無に関わらず公平に知的資源としての資料へのアクセスを提供している。この公平なアクセスの提供によって、図書館は、著者の主張について不特定多数の利用者からなる大衆による同意的承認という「意味の量的構成」の転化を

可能にする社会的機構としてきわめて大きな意義を有しているのである。

2.3 主張としての「図書」への要求の特殊性

中井は、「印刷される論理」を構成する「生産の論理」のなかで、商品性という概念を取り上げ、物の存在をめぐる重要な概念を提示している。その概念は、著者の主張を著した図書への利用者の要求の特殊性を示唆する重要な枠組みとなるものである。

中井は、市場経済の原理が機能する現代社会において生産される商品の特性について、次のように、セメントを例に独創的な概念をもちいて議論を展開している。

私たちは売買の現象は単なる経済現象であって、論理およびその一般性とは何の関係もないかのように考えやすいが、事態を正確に観察するならば、決してそうではないのである。例えば、ここに**セメント**を売っているとす。そこで売っているということは仔細に観察するならば、これは**セメントであるか**、と人間の需要的要求に向かって問うているわけである。それがこの利潤機構の限界内で、少しでもセメントが付託されている機能に適合しないものがある場合、人々は買わないことによって、それをプラクシスとして実存在 Existenz の領域より排除してしまう。現段階においては、売れないものとは、存在しないもの、非存在を意味しているのである。「である」の可能存在は、そのまま「がある」の**現実存在**に連続するのである。²¹[傍点と強調文字は原文のまま]

図書館資料の利用は、経済現象とはみなされないが、ここで指摘されている「である」の可能存在と「がある」の現実存在との関係性は、以下で述べるとおり、利用者の要求する図書館資料のもつ特殊性にもあてはまる重要な視点を提供している。

基本的に、購買の対象となる一般商品は、それを購買する人々にとって同じ機能が期待されている。すなわち、人間がセメントに対して有している需要的要求とは、何らかの物体を固めるという機能であろう。その機能をもたない限り、それは購買されない。セメントを購買するとき、セメントには、そうした需要的要求を充足するかどうか判断され、評価される。この判断と評価の結果、需要的要求をみたすと判断されたならば、まずセメント「である」と認定され、次にそこにセメント「が

ある」と認識され、購買されるという過程をたどる。需要的要求をみたさず、セメント「である」と認定されなければ、そこにセメント「がある」という判断は下されず、購買されないどころか、その存在自体が無きものとされてしまうことになる。

さて、利用者による図書館資料の選択は、利用者自らの要求をみたすかどうかによって判断される。この判断において依拠される要求は、セメントのような商品とは違い、個々の利用者によって異なる。ある利用者にとっては重要であり有用な内容をもつ図書と判断されたとしても、別の利用者にとってはまったく無価値な図書と判断される可能性があるということである。ここに図書館資料のもつ要求と価値判断の関係性における困難が生じるのである。つまり、セメントのように、基本的に求められる機能・価値が同一である一般の商品とは違い、図書は利用者ごとに異なる機能が求められ、価値判断がくだされるのである。

以上の考察をふまえ、次に、一般の商品への要求と図書や記事等の図書館資料への要求との違いについて一般化を試みる。一般の商品A、たとえば「セメント」というとき、個々のセメントの違いは問題にならず、セメントに求められる固めるという機能を有する白い粉であれば、すべてのセメントはセメントとして一括される。それに対して、図書は、ある著者xの書いたyというタイトルをもち、zという出版者から出版された図書Aとして認識される。もちろん、x、y、zが共通の図書が5000部発行された場合、5000部のそれぞれを区別することなく、図書Aとして一括して扱うことになる。しかし、x、y、zが異なる別の図書は、もはや図書Aとして一括して扱うことはできず、図書B、図書Cとして、異なる著者による意味の質的構成を有する独立した図書として位置付けられる。

すなわち、タイトルを異にする個々の図書が、セメントの機能を有するすべてのセメントという商品全体に対応するのである。換言すれば、セメントについては、セメントという概念をみたす個々の物理的個体としてのセメントを要素にもつ「セメント」という集合が要求の対象となる。それに対して、図書の場合、図書という集合の要素となるタイトルを異にする個々の図書が要求の対象となるのである。こうしたセメントと図書に対する要求の違いは図4のように図式化できる。

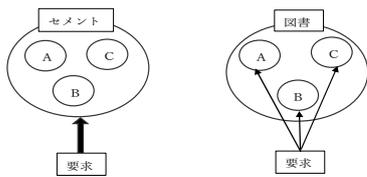


図4 要求の対象としての一般商品と図書の違い

セメントとして実際に購買されるのは個々のセメント A, B, C であるが、その要求はセメント全体に向かっており、購買者にとって A, B, C の違いは問題にならない。それに対して、図書への要求は、タイトルを異にする個別の図書 A, B, C に向かうのであり、要求をもつ個々の利用者ごとにその向かう先の図書も異なる。

図4に示したように、セメントへの要求の構造は基本的に一般の商品にもひとしくあてはまる。それに対して、図書については、同一タイトルの図書ごとに「である」の可能存在と「がある」の現実存在をあてはめて考える必要がある。図書Aが、ある利用者Xの要求をみたさない、すなわち、その利用者にとってその図書は自らの要求をみたす図書「である」の可能存在ではないことから、直ちに図書Aは必要ないもの、その図書「がある」の現実存在が否定され、存在しないものとはならない。というのは、その図書が別の利用者Yの要求をみたす可能性が常に開かれているからである。

その一方で、図書の主張すなわち著者の判断的是認に対する利用者の同意的是認の量としての意味の量的構成の指標として、貸出件数の値が、個々の図書の存在、非存在を決定する指標となる可能性は否定できない。なぜなら、主張とは、主張者の判断的是認を他者が是認することを目的に行われるとするならば、その判断的是認の是認の量はその主張の非存在、存在を決定するものといえるからである。それゆえ、判断的是認の是認の量が少ないということは、主張者である著者にとって、主張する目的を十分に達成していないことを意味することになる。

中井は、商品の物価とは、“一定の存在をして、実存在たらしめていることを、人間活動のプラクシスが許容している现阶段の境界線”²²⁾と述べている。もちろん、商用出版物としての図書にも価格が設定されており、その価格は図書の有用性、知識としての価値から形成される市場価値を示すものである。それに対して貸出件数は、図書館という場における、市場経済でいうところの物価に相当する概念と考えられ、その値がその図書館におけるその図書の存在意義における境界線としてもちいられる可能性は否定できない。

ただし、先述したとおり、セメントのような一般の商品への要求と特定の図書への要求は図4に示したように構造的に異なる。セメントに代替する商品が開発され、セメントの有用性が低下するとすれば、セメントの有用性の低下は購買者全体がひとしく認識するものである。それに対して図書の場合、ある利用者にとってその有用性の低下は、他の利用者にとっての有用性の低下をただちに意味しない。ある図書が利用者にとってもはや有用でなくなっても、別の利用者にとって依然として有用性を保持する可能性は十分にある。こうした利用者の個別性をどこまで配慮し、特定の図書の有用性と図書館における存在意義を評価するかが、図書館サービスの評価の最大の課題の一つといえる。利用者の個別的要求を考慮するとき、貸出件数という量的指標のみで特定の図書を評価することの限界と問題点がそこに浮き彫りになるのである。

この章を締めくくるにあたり、次の中井の指摘を紹介する。価値の量的評価に偏重した市場経済下の現代社会への警告として指摘されたものだが、図書館サービスの評価を貸出件数に過度に依拠することへの警告として、重く受け止めなければならない。

その存在が生産物である場合はもちろんであるが、それは自然存在として、山でも川でも、生物、動物のすべてにおいて、ついには人間ですら、すべて売物であり、それが売買価値を失う時、それは常に非存在の領域に転落する強力な歪みを受けているのである。²³⁾

図書館において、貸出件数の低い図書を存在しない物とみなし一律に除籍することは、少数とはいえ、その図書を求める利用者を非存在の領域に転落させることを意味するのである。

3. 否定判断を媒介とする問いの生成とレファレンス質問

本章では、中井が「委員会の論理」において確信と主張の議論を展開するうえで重要概念として注目したヴァインデルバントの否定判断論²⁴⁾を取り上げ、レファレンス質問の生成機構の基底について考察する。

ヴァインデルバントの否定判断論が示す否定判断の興味深い特徴は、ある主張を否定するとき、そこには、「問い」が生成され、その問いへの回答として否定判断が行われる、という点にある。本章では、こうした否定

判断と問いの関係性をふまえつつ、否定判断から次なる問いが生成され、その問いへの回答として否定判断と肯定判断が生じるという関係性を提示する。そのうえで、この問いと否定判断との関係性が、レファレンス質問の生成機構の基底を説明する枠組みとなることを明らかにする。

さらに、ヴァインデルバントによる肯定判断と否定判断に関する「無関心点」の概念をもとに、利用者のレファレンス質問の提示から図書館員によるレファレンス質問の受理と回答の提供にいたる機構の基底について考察する。

3.1 ヴァインデルバントの否定判断論に関する考察

3.1.1 ヴァインデルバントの判断論

ヴァインデルバントが提示した否定判断と問いの関係性を取り上げる前に、そもそもヴァインデルバントが判断をどのように定義しているのかを見ておきたい。

A. デゥワルク(Arnaud Dewalque)は、ヴァインデルバントの「判断」の定義について次のように形式化している。すなわち、「AがxはFであると判断する」とき、次の三つの条件をすべて満たす行為とみなすのが、ヴァインデルバントの判断に関する捉え方であるとしている。ここで、Aは判断者、xは個体をあらわす変数、Fは述語、Cは「xはFである」という文(命題)をそれぞれ表している。

- 1) Cという内容の命題がある
- 2) Aは真か偽かの選択肢を仮定する
- 3) AはCの真理値を評価する²⁵⁾

この定義からわかるように、判断は、真か偽の評価が可能な命題に対して行われるものである。そして評価対象の命題が真であれば肯定判断となり、偽となれば否定判断となる、ということである。

ヴァインデルバントが否定判断を説明する際に取り上げている「この薔薇は赤い」、「この薔薇は赤くない」という判断を上記の定義にあてはめてみよう。いま、一郎がある薔薇を見て「この薔薇は赤い」と肯定判断するならば、Aが一郎、xが薔薇、Fが赤い、Cが「この薔薇は赤い」にあたる。そして、一郎が「この薔薇は赤い」というとき、その命題について真であるとの評価を与えていることになる。それに対して、一郎が「この薔薇は赤くない」と否定判断するならば、一郎は「この薔薇は赤い」という命題について偽であるとの評価を下していることになる。ここで注意すべきことは、判断において、

その真偽の評価が妥当かどうかは保証されていない、ということである。本来、真である命題について、偽と判断することがありえる、ということである。つまり、「この薔薇は赤い」が真であるにもかかわらず、その薔薇を見て「この薔薇は赤くない」と誤った否定判断をくだすことがありえる、ということである。

3.1.2 ヴァインデルバントの否定判断論

ヴァインデルバントが指摘した「否定判断は問いへの回答である」とは、ある事象に関してくださる否定判断が単に肯定判断の拒否ということだけでなく、否定判断の前に必ず問いが生成され、その問いへの回答として否定判断がくださる、というものである。

ヴァインデルバントは、否定判断が問いにもとづく判断であることについて、次のように指摘している。

もし、私が私の知覚作用を此薔薇は白し、と云う判断によって現はすならば、其時に思惟された表象結合は何ら先行する問ひなくして肯定せられり、夫れに反し、此薔薇は赤からず、と云う時には、完成せる知覚に先づ赤なる表象が付加しなければならず、かくして更に、「此薔薇は赤いだろうか」との問ひが作られ、然る後にこれが否定せられねばならぬ。²⁶⁾

いま、ある人間が「この薔薇は赤くない」という否定判断をしたとしよう。この否定判断は、その人間がいま現に知覚している薔薇の色が赤色とは矛盾していることに気づいたうえでの判断であることに注意したい。この矛盾への気づきこそが「この薔薇は赤いのか」という疑念を示した問いを生成するのである。そして、現に今見ている薔薇の色と照合され、その結果、「この薔薇は赤いのか」という問いに対する回答として、「この薔薇は赤くない」という否定判断がくださることになる。

それに対して、「この薔薇は赤い」という肯定判断は、その判断者が知覚している薔薇の色と矛盾していないとの判断にもとづく評価として主張されたものである。そこには薔薇の色に関する疑念は生じていない。

デゥワルクは、こうした「否定判断は問いへの回答である」というヴァインデルバントの否定判断論について、次のように形式化している。

- (R) わたしは、SはPであるという表象をもつ
- (Q) わたしは、SがPであるかどうか疑問である
- (J1) わたしは、SがPであることを肯定する
- (J2) わたしは、SがPであることを否定する
- (J3) わたしは、SがPであるかどうか知らない²⁷⁾

上記のSとPからなる五つの文について、具体的な例を使って説明しよう。再び、「この薔薇は赤い」という例でいえば、Sが「この薔薇」、Pが「赤色」を指示することになる。

そこで、上記の(R)は、わたしが「この薔薇は赤い」という命題を頭のなかに描いている、すなわち、薔薇という表象と赤いという表象が肯定の関係で結合させていることを意味している。簡単にいえば、現に知覚している薔薇があって、その色が赤いというイメージをもっている、ということである。

(Q)は、「この薔薇が赤い」という肯定判断に疑問をもっていることを表している。

(J1)は、「この薔薇は赤い」という肯定判断を表している。

(J2)は「この薔薇は赤い」という肯定判断を否定した否定判断を表している。

(J3)は、これまでの文とは異質なものであり、Sが命題に関する真理値の判断をくだすだけの知識も証拠も有していないことを表している。否定判断も肯定判断もくだすことができない状態におかれている、ということである。

デウワルクは、こうした形式化にもとづき、ヴァインデルバントの否定判断論について次の3点が重要であると指摘している²⁸⁾。

第一に、否定判断を行うためには、判断の対象について何らかの表象をもっていることが求められる。すなわち、(R)は(J2)の必要条件であること。なお、(R)はいまでもなく肯定判断の(J1)の必要条件である。また、(J3)にとっても、(R)は必要条件である。なぜなら、Sは、真理値の判断をくだすだけの知識はもたないが、Pという表象を頭のなかに描いていることを(J3)は意味しているからである。

第二に、(R)とは対照的に、(Q)は(J1)の必ずしも前提である必要はない。なぜならば、先述したとおり、知覚されたものに関する肯定的判断は基本的に疑念をいだくことなく、くだされるものだからである。それに対して、ヴァインデルバントのいう「否定判断は問いへの回答」とは、(Q)が(J2)の前提となるということの意味している。ある判断(肯定判断だけでなく、否定判断でもよい)を否定するということは、その判断への疑念が基底にあると考えられるからである。そして、その疑念が問いを生成し、その後、否定判断が行われるということである。肯定判断が(R)のみを前提とするのに対して、否定判断は、そこに問いが媒介するという点において、

問いの設定、問いへの回答という二段階をへて成立する判断ということになる。

第三に、ヴァインデルバントに最も固有な見方として、ヴァインデルバントが(J3)を第三の判断の質として認めていることにある、とデウワルクは指摘している²⁹⁾。これは肯定も否定もできない判断の留保を意味するものといえる。すなわち、(J3)は、SがPの真理値の評価が可能となるだけの知識や証拠をもっていないために、判断ができない状態にある、ということである。この判断留保の状態は、次節で取り上げる、ヴァインデルバントが提示した判断における「批評的無関心点」にその判断者がおかれていることを意味している。

以上のヴァインデルバントの否定判断論の構造は図5のように図式化することができる。

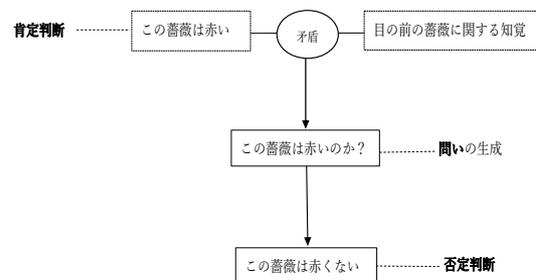


図5 ヴァインデルバントの否定判断論の構造

ヴァインデルバントは知覚した内容と肯定判断の内容との矛盾から問いが生成されるとは明示的に述べていない。しかし、なぜ問いが生成されるのかといえば、それは知覚した内容と肯定判断の内容との矛盾から、肯定判断に疑念をもったからにほかならない。

ところで、ヴァインデルバントもその否定判断論を形式化したデウワルクも、否定判断というものを、「肯定判断」に対する疑念から生じる問いへの回答としており、否定判断の対象が否定判断であるような事態を想定していない。しかしながら、ある否定判断に対して疑念が生じ、そこに問いが生成され、当初の否定判断を否定するような判断がくだされる場合もあることに注目する必要がある。たとえば、いま、ある薔薇を知覚し、「この薔薇は赤くない」という否定判断をしたものの、その否定判断に疑念が生じ、問いが生成され、当初の否定判断を否定する判断、すなわち、「この薔薇は赤くない」、ということはない」という否定判断をくだす場合もあり得るということである。否定判断の否定であるから、結果的に肯定判断をくだすことになるが、重要なのは、否

定判断自体も否定判断の対象になる、ということである。否定判断の対象を肯定判断だけでなく否定判断をも含めることの重要性については、次節で詳しく取り上げる。

3.2 否定判断を媒介とするレファレンス質問の生成

前節で見たとおり、ヴィンデルバントの否定判断論は、生成された問いへの回答として否定判断がくだされる、というものであり、肯定判断への疑念を起点とし、否定判断を終点とするものである。ただし、疑念の対象となるのは、肯定判断だけでなく、否定判断であってもよい。肯定判断にせよ、否定判断にせよ、現に有している判断への疑念から生じた問いに対して否定判断がくだされた場合、今度はその否定判断の妥当性を検証し、真となる命題からなる肯定判断を得るための新たな問いの生成をもたらすことになる。先ほどの図5の例でいえば、既存の肯定判断「この薔薇は赤い」を否定した「この薔薇は赤くない」という否定判断を検証するために、あるいは、既存の否定判断「この薔薇は赤くない」を否定した「この薔薇は赤くない、ということはない」という否定判断を検証するために、「では、その薔薇は何色なのか？」という新たな問いが生成される、ということである。新たな問いは、既存判断を否定した否定判断が媒介する問いとして捉えることができる。否定判断という回答を導く問いを「第一次の問い」とするならば、その否定判断が今度は媒介する新たな問いは「第二次の問い」といえる。

さて、これまでの否定判断論の考察をふまえ、レファレンス質問の生成と否定判断との関係性について検討する。そこで、次のレファレンス質問を取り上げてみたい。

「関ヶ原の戦いの年は西暦何年か？」

ある利用者によってこのレファレンス質問が提示される背景と経緯を考えてみよう。その利用者が現時点で有している「関ヶ原の戦いの年は西暦〇〇〇〇年である」という肯定判断、あるいは「関ヶ原の戦いの年は西暦〇〇〇〇年でない」という否定判断について、前者の肯定判断に対しては「関ヶ原の戦いの年は西暦〇〇〇〇年である、というのは確かなのか?」、後者の否定判断に対しては「関ヶ原の戦いの年は西暦〇〇〇〇年でない、というのは確かなのか?」という疑念をもつとき、そこには当初の判断

に対する否定判断が芽生えていることになる。こうして、いま現に有している当初の判断が肯定、否定にかかわらず、その既有判断に疑念をもち、その既有判断を否定する判断を生じさせることが、レファレンス質問の生成の基底となるのである。

既有判断が肯定判断、否定判断に関わらず、既有判断に疑念をもち、否定判断をくだすことの重要性について例示しよう。ある人間が「関ヶ原の戦いの年は西暦〇〇〇〇年である」という肯定判断に疑念をもち、あるいは「関ヶ原の戦いの年は西暦〇〇〇〇年ではない」という否定判断に疑念をもち、その肯定判断あるいは否定判断を維持し続ける限り、「関ヶ原の戦いの年は西暦〇〇〇〇年なのか?」というレファレンス質問を生成することはない。たとえば、その人間が、実際に「〇〇〇〇年」の〇〇〇〇のところに、「1603」という数字を入れて肯定判断をしていた場合、正しくは西暦1600年であるにも関わらず、その誤りは正されることなく、「関ヶ原の戦いの年は西暦1603年である」という偽となる命題を信じ続けることになる。また、「〇〇〇〇年」の〇〇〇〇のところに、「1600」という数字を入れて否定判断をしている場合は、その誤った否定判断が正されることなく、「関ヶ原の戦いの年は西暦1600年ではない」という偽となる命題を信じ続けることになる。

以上のとおり、既有判断が肯定判断であるか否定判断かどうかに関わらず、その既有判断に疑念をもち、否定判断を生じさせることこそが、真となる命題に近づく機会となるのである。

さて、肯定判断あるいは否定判断の形式をとる既有判断への疑念とは、自らの既有判断が信頼性のある根拠にもとづいた真理値の評価をしていないこと、すなわちその命題が真か偽かの判断をしかるべき典拠資料にもとづいて評価していないという認識から生じる。すなわち、自らの既有判断を構成する命題について、その真理値が未評価であるとの認識により、自らの既有判断に確証がもてなくなり、疑念が生じ、既有判断を否定する判断をもたらすのである。

既有判断が肯定判断であるか否定判断であるかに関わらず、既有判断への疑念から生じる否定判断もまた、真理値未評価の判断であることに変わりない。そこで、その人間は、その否定判断が妥当なのかどうかを知るために、「関ヶ原の戦いの年は何年なのか?」というレファレンス質問を生成するのである。

このレファレンス質問が図書館員に提示されたた

らば、図書館員はそれを受理し、適切な典拠資料を参照して、真理値評価の結果、真となる命題を回答として利用者に提示することになる。以上の過程を図式化したものが図6である。

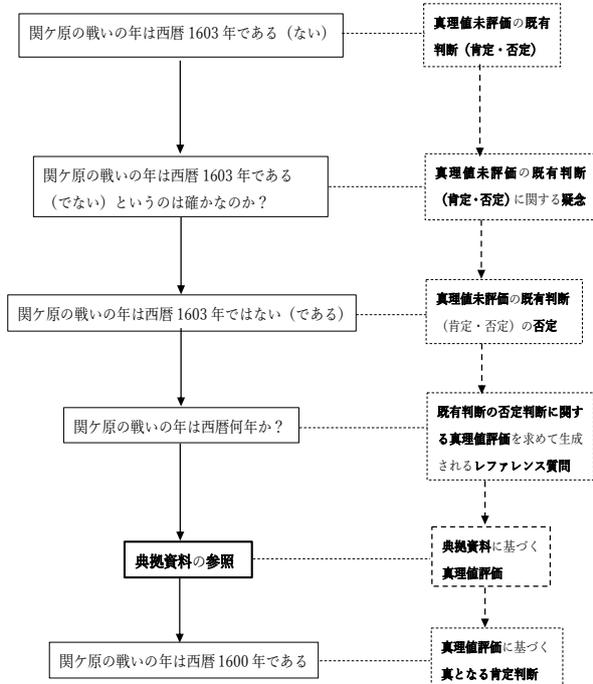


図6 否定判断とレファレンス質問の生成と回答

ヴィンデルバントは、“問いは、真理価値は決定されていないが、しかしそれに対する要求をもった表象結合である[傍点は引用者]”³⁰⁾と指摘している。この指摘はきわめて重要である。レファレンス質問は、いまだその質問の基底にある命題の真理値が典拠にもとづいて評価されていないところから生成され、その真理値を要求する問いに他ならない。

以上、ある特定の命題に関する具体的な既有判断の否定判断にもとづいてレファレンス質問が生成されるケースを見てきた。ところで、レファレンス質問の生成のもう一つのケースとして、その質問に関係する命題について具体的な既有判断を何ら有していない状態があげられる。たとえば、「関ヶ原の戦いの年」について肯定判断も否定判断も有していない状態、すなわち、「関ヶ原の戦いの年」について何らの知識ももっていないような状態である。これは、その人間が有する日本の歴史に関する既有判断の集合の要素のなかに「関ヶ原の戦いの年」に関する判断が含まれていないことを意味している。そしてこのことは、「関ヶ原の戦いの年」を知ろうとする人間

にとって、日本の歴史に関する自身の既有判断には依拠できないという判断、すなわち、「**既有判断の存在に関する否定判断**」として捉えることができる。この場合、利用者が「関ヶ原の戦いの年は何年なのか?」というレファレンス質問を提示し、その回答が図書館員から提供されたならば、「関ヶ原の戦いの年は 1600 年である」という新規の肯定判断がその利用者の既有判断の集合のなかに追加されることになる。

3.3 レファレンス質問の生成・提示と判断の無関心点

中井は、ヴィンデルバントの否定判断論に関連して、ヴィンデルバントの判断の強度における無関心点の概念に注目している³¹⁾。この概念は中井の「委員会の論理」における確信と主張の議論のなかでも重要な論点を提供するものとなっている。

この無関心点とは、判断の強度に関わる概念であり、肯定判断も否定判断も行われぬ零の点である。ヴィンデルバントはこの無関心点について次のように述べている。中井もその一部を「委員会の論理」において引用している箇所でもある。

完全な確実な両端(肯定、否定)から次第にその度を弱めるにしたがって、強度は肯定も否定も現れていない無関心点に近づく。論理的評価の目盛りのこの零の点は、判断の性質論にとってまったく重要な意義を有している。なぜというに、それもまた一義的でないからである。すなわち肯定的反応と否定的反応との間の無関心はこの場合、絶対的か、もしくは批評的かでありうるからである。絶対的無関心は、一般にいまだ判断せられていない時に存する。しかし批評的無関心は、完全な論究後、肯定も否定もまだ同様に留保せられる時に存する。[中略] 絶対的無関心はただ問いの場合にのみ現れる。問いにおいては表象結合はいわば単に試作されているに止まらずして、完成せられる。それからその表象結合に真理価値の評価と関係せしめられるのであるが、しかしこの評価のみが未だ完成せられていないのである。[中略] 問いは、真理価値は決定されていないが、しかしそれに対する要求をもった表象結合である[傍点は引用者]³²⁾。

このようにヴィンデルバントは、否定判断も肯定判断もくみだされていない判断の状態を無関心点とし、そのう

えて、この無関心点を「批評的無関心」と「絶対的無関心点」とに区別している。前者の批評的無関心点とは、思考・探究のすえ、肯定も否定もできない状態の判断の地点をいう。この批評的無関心とは、ある課題や問題について思考し、探究する者が到達する無関心である。ある課題や問題に取り組んでいる者がその課題や問題に関わる命題について思考・探究しているものの、その命題に関する真理値評価において真または偽の評価ができない状態、すなわち、真理値評価を留保した結果生じる判断の状態である。ゆえに、批評的無関心点にある者は、命題の真理値評価をもとめて問いを生成することになる。

それに対して絶対的無関心点とは、他者からある問いが提示された者がおかれる状態である。この絶対的無関心点について、中井は次のように述べている。

その命題についていまだ問題としたことのない者が突然他者によって一つの命題を提出された時、そこにあるべき無関心的蓋然性、すなわち表象の組みあわせとしての意味だけであって、評価あるいは志向性において判断中止の状態に置かれている純粹なる記憶態は、すなわち聴取者のもつ判断構造である。³³⁾

引用の冒頭にある「その命題」とは、提示された問いに関わる命題を指している。この中井の指摘にあるとおり、絶対的無関心点におかれた者とは、聴取者の立場にあたる存在である。ある命題に関わる問いを提示された者、すなわち、中井のいう聴取者にとって、その問いははじめて目にし、聴くものであることから、その者はただ問いの内容、すなわち表象結合のみを受け取るだけの存在である。この表象結合とは、問いを構成している文章内容の理解を意味している。他者である聴取者にとってその問いはまったく初めて接するものであることから、関心を寄せることも、肯定・否定の判断をくだすことも、原理上、不可能であるゆえ、絶対的無関心という表現があらわれているのである。

さて、ここで図書館利用者の問いであるレファレンス質問とこの無関心点との関係性について見ていきたい。図7は、レファレンス質問を提示する利用者とその質問を受理した時の図書館員の無関心点における関係性を示したものである。

レファレンス質問を提示する利用者は、批評的無関心点にいるといえる。それは、レファレンス質問は何らかの課題や問題を解決するために思考・探究の結果、

生成された問いだからである。思考・探究の結果、質問に関わる命題の真理値が決定できない状態、または質問に関わる命題を扱った判断を有しない利用者といえる。

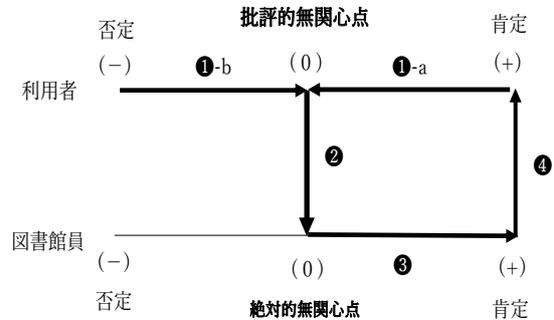


図7 無関心点におけるレファレンス質問の生成・提示・受理・回答の機構

では、利用者はどのような過程、経緯をへてレファレンス質問を提示するこの批評的無関心点に到達するのであろうか。利用者のレファレンス質問の生成に至る過程については、R.S. テイラー(R.S. Taylor)の情報ニーズのレベルに関する理論³⁴⁾がある。この理論によれば、課題や問題をかかえた人間は当初、情報ニーズを意識化できず、問い自体の生成ができない段階にある。この無意識の段階から問いへの生成と利用者の既有判断とはどのような関係にあるのだろうか。それは、課題や問題への取り組みを進めるなかで、無意識のレベルにあった既有判断が意識化されることとして捉えることができる。

無意識にある既有判断とは、その課題や問題に関係しその解決につながる命題に関する既有判断を有しているながら、課題や問題に取り組むまでは無意識のレベルにあり、その存在に気づかないような既有判断である。そして、意識化された既有判断とは、課題や問題への取り組みを進めるなかで、無意識のレベルから呼び起こされた既有判断である。こうして、既有判断が意識化されたものの、その既有判断に確信がもてず疑念をもったとき、そこに問いが生成されるのである。意識化された既有判断が肯定判断であるとき、それが課題や問題の解決につながる命題として疑念をもつ過程が、図7の①-aの過程にあたる。それに対して、意識化された既有判断が否定判断であり、それが課題や問題の解決につながる命題であることに疑念をもつ過程が、図7の①-bの過程に相当する。

それでは、取り組んでいる課題や問題の解決につながる判断が意識のなかにそもそも存在しない場合は

どうなるのであろうか。すなわち、無意識のレベルにある既有判断をいくら呼び起こしても、課題や問題の解決につながる判断が見つからない場合である。換言すれば、この状態とは、課題や問題の解決につながる命題を扱った判断を欠いているような場合である。そこで、課題や問題の解決につながる真なる命題をもとめる問いが生成されることになる。この場合の利用者は、肯定判断からなる既有判断を参照しても関係する判断はなく、否定判断からなる既有判断を参照しても関係する判断はないことを認識したことになる。それゆえ、その場合の利用者は図7の①-aと①-bの両過程を経て批判的無関心点に到達することになる。

無意識から呼び起こされ意識化された既有判断への疑念から生成された問いであれ、既有判断にはない新たな真なる命題からなる判断を求める問いであれ、それが図書館員に提示されたとき、その問いは図書館員による直接サービスの対象となるレファレンス質問となる。それに対して、その問いを図書館員に提示することなく、利用者自身がレファレンスコレクションから典拠資料を探索し、入手できた適切な典拠資料を参照して真なる命題を得て肯定判断を形成する場合もある。この場合、その問いは間接サービスを利用したレファレンス質問となることを付言しておきたい。

それでは、利用者から提示されたレファレンス質問を受理する図書館員はどのような位置づけになるであろうか。図書館員は、上述の中井の指摘にある「聴取者」にあたる存在であり、問いに示された表象結合、すなわちレファレンス質問の文字通りの内容のみが利用者から提示された状態に置かれている。図書館員にとって、そのレファレンス質問は初めて接するものであることから、レファレンス質問を受理した時点における図書館員はその質問が扱っている命題に関して否定判断も肯定判断もできない状態に置かれている。それゆえ、レファレンス質問を受けた図書館員は、絶対的無関心点にいるといえる。

そこで、レファレンス質問を受理した図書館員は、典拠資料を参照し、質問が扱っている命題に関する肯定判断、すなわち真理値評価の結果、真となる判断の強度を高めていき、強度の最高点に達した時点でその回答を利用者に提供することになる。利用者は真理値評価において真なる回答を図書館員から受けたことにより、最高度の肯定判断がくだせる状態に到達できたことになる。

図7に示した無関心点におけるレファレンス質問の生成・提示・受理・回答の機構について具体的な例を

つかって説明しよう。再び、質問に関わる命題として「関ヶ原の戦いの年は西暦1600年である」を取り上げる。以下、この命題を p として表す。

いま、ある利用者が、命題 p に関する既有判断として、肯定判断をしていたとしよう。この肯定判断をしている利用者の命題 p に関する認識は、「論理式 p 」として表現することができる。しかしながら、思考・探究の結果、その肯定判断に疑念が生じ、その肯定判断の強度を低下させ、批判的無関心点に到達したとしよう。当初の肯定判断の強度を低下させることは、その肯定判断を否定する方向に判断の状態が変化、移行していることを意味する。この過程を示したのが図7の矢印①-aである。肯定判断の強度が零に達したということは、その命題に関する肯定判断と否定判断が共存するという矛盾した状態に利用者がおかれたことを意味しているといえる。この時点における利用者の命題 p に関する認識は、次の論理式³⁵⁾で表現することができる。

$$p \wedge \neg p$$

この論理式は、「 p であり、かつ p でない」という矛盾した命題を示す論理式であり、命題 p について真理値が決定できない真理値未評価の状態に利用者がおかれていることを意味している。つまり、「関ヶ原の戦いの年は1600年である」という命題とその否定命題「関ヶ原の戦いの年は1600年ではない」が自己の記憶内に共存しているという矛盾した認識状態、すなわち、どちらの命題が正しいのか判断できない状態にあることを意味する。

上記の「論理式 ($p \wedge \neg p$)」の真理値は当然ながら偽となる。その真理値の決定において、 p とその否定を表す $\neg p$ の出現順序の影響を受けないが、論理積演算子 \wedge の左辺に p を、右辺に $\neg p$ を表記したのは、当初、肯定判断をしていたものが、否定判断も受け入れるという矛盾した認識状態におかれた結果、その命題について真理値決定不能な状態に利用者の認識が遷移したことを表すためである。

一方、ある利用者が命題 p に関する既有判断として、否定判断をしていたとしよう。この否定判断をしている利用者の命題 p に関する認識は、「論理式 $\neg p$ 」として表現することができる。しかしながら、思考・探究の結果、その否定判断に疑念が生じ、その否定判断の強度を低下させ、批判的無関心点に到達したとしよう。この否定判断の強度の低下は、当初の否定判断を否定する方向に、判断の状態が変化、移行しつつあることを意

味する。この過程を示したのが図7の矢印①-bである。否定判断の強度が零に達したということは、その命題に関する肯定判断と否定判断が共存するという矛盾した状態に利用者がおかれたことを意味するといえる。この利用者の命題 p に関する認識は、次の論理式で表現することができる。

$$\neg p \wedge p$$

この論理式についても、 $\neg p$ と p の出現順序は真理値に影響を与えないが、論理積演算子 \wedge の左辺に $\neg p$ 、右辺に p を置いたのは、当初、否定判断をしていたものが、その否定判断であるところの肯定判断も受け入れるという真理値決定不能な状態に利用者の認識が遷移したことを表すためである。

「関ヶ原の戦いの年」について肯定、否定のいずれの既有判断をもたない利用者は、既有の肯定判断、否定判断を参照の結果、「関ヶ原の戦いの年」に関する判断を有していないことを認識した時点において、批評的無関心点に到達したといえる。批評的無関心点にいる利用者はその年を知るための問いを生成することになる。このような利用者は「関ヶ原の戦いの年は〇〇〇〇年である」あるいは「関ヶ原の戦いの年は〇〇〇〇年ではない」のいずれかの判断、すなわち、〇〇〇〇に数字が埋められていない文からなる判断を有している状態といえる。そして当然ながら、この場合、具体的な数字が入っていない文は真偽の判定ができず、したがって命題でないという意味で、真理値決定不能な状態にある。

このように、ある命題について真理値決定不能な状態が「無関心点」の状態である。そこで、既有判断をもった利用者が命題 p に関する矛盾した認識状態におかれ、無関心点に達した利用者は、命題 p の真理値を決定するために、「関ヶ原の戦いがおきた年は西暦何年なのか？」というレファレンス質問を図書館員に提示することになる。あるいは、既有判断をもたない利用者の場合には、「関ヶ原の戦いの年は〇〇〇〇年である」という数字を欠いた判断から数字が入られた真となる命題からなる判断をもとめて「関ヶ原の戦いの年は何年なのか？」というレファレンス質問を提示することになる。この過程が図7の矢印②である。

レファレンス質問を受理した図書館員は、原理上、その受理の時点で初めて接した質問であり、その質問内容を理解するだけで、その質問が関わる命題の真理値について何らの判断もくたせる状態ではない。も

ちろん、同様の質問をすでに他の利用者から提示されているような場合もあろうが、重要なことは、いま現に接遇している利用者から受けた初めての質問であるということである。過去に異なる利用者から受けた質問と文字通り同じ内容であっても、利用者が異なれば、新たな質問として取り扱うことが求められる。それは、利用者がそうした質問を提示した動機や目的、さらにはその質問がかかわる命題に関する既有知識などが、最終的に回答を提供するうえで考慮されなければならないからである。

さて、図書館員による質問内容の理解とは、ヴァインデルバントのいう表象結合ということであり、図書館員の意識のなかで、「関ヶ原の戦い」という表象がまず形成され、それを受けて「その戦いの年」という表象が形成され、その二つの表象が結合して、質問内容が理解されるということである。そこには、肯定、否定のいずれの判断も未だ関与してないがゆえに、レファレンス質問を受けた図書館員はヴァインデルバントのいう絶対的無関心の状態におかれていることになる。

質問内容を理解した図書館員は歴史年表や歴史事典などの典拠資料を参照し、「関ヶ原の戦いの年は西暦1600年である」という真となる肯定判断を獲得し、さらに複数の典拠資料を参照してその肯定判断の強度を高め、やがて最高度に達する。この最高度に達するまでの過程が図7の矢印③である。肯定判断が最高度に達した図書館員は、その真となる肯定判断を典拠資料とともに利用者へ回答として提供することになる。この過程が図7の矢印④である。

なお、レファレンス質問の内容によっては、図書館員の既有知識で回答が可能な場合もあろう。しかし、たとえ図書館員の既有知識で回答可能であっても、典拠資料にもとづくことなく、回答を提供することがあってはならない。信頼性のある典拠資料にもとづいて回答を提供することが、レファレンスサービスに求められている基本要件となるからである。

3.4 問いとしての主張と図書館資料

図書館資料を構成する図書や記事・論文は、2章で述べたように、著者の主張を著したものに他ならない。そして、これらの主張としての図書館資料は、レファレンスサービスにおいて、命題の真理値評価を求めるレファレンス質問、あるいは既有判断にはない新たな真なる命題を求めるレファレンス質問への回答を提供するうえで典拠資料となるものである。この典拠資料となる図書館資料も、実は著者が自らの主張の真理値評

価のさらなる厳密性を追求するために、他者である読者、利用者により外部評価を求めた問いとして捉えることができる。本章を締めくくるにあたり、中井が到達した「問いとしての主張」という考え方を以下に示す。

思惟の後に**確信**した一つの表象結合を、自らの思惟内の幾度かの問い、すなわち**内的評価**のあとに**主張**に転じたところのいう立場、そこには再び、この判断は、問いの機構への再還元がおこなわれているのである。[中略]

すべての主張は一つの問いでないであろうかどうか。そこに肯定のもつ弁証法的内面があるかのである。人が発表せざるにいられないのは決して心理的基礎のみでなくして、論理がその真理へと自らを押し進めるにあたって、肯定と否定の厳密性を狙う緊張がこのより大きな問いへと、自らの否定性を押し上げるのである。³⁶⁾[強調文字は原文のまま]

レファレンスサービスの典拠資料となる図書館資料は、レファレンス質問で問われている命題の真理値を確定させるもの、あるいは新たに求める真なる命題を提供するものである。しかし同時に、その典拠となるべき図書館資料さえも、そこで主張されている内容は、さらなる厳密な真理値評価を受ける対象となるのである。レファレンスサービスにおいても、図書館資料を最終典拠にしつつも、典拠として使用した資料で示されている主張に関する真理値評価のより一層の厳密性を求めて、その主張内容に疑念をもち、否定判断の可能性を閉じることのない姿勢が図書館員には求められるのである。

おわりに

中井が「委員会の論理」において取り上げた確信と主張の枠組みは、著者の主張と図書館利用者との関係性を理論的に捉えるための枠組みとなることを見てきた。その枠組みにもとづき、図書館は、著者が著した「図書、記事・論文」をとおして主張した内容に対して、利用者による承認を得る機会、意味の量的構成のための公平な機会を提供する社会的機構であることを示した。また、ヴィンデルバントの否定判断論にもとづき、レファレンス質問の生成が否定判断にもとづいて生成されるという機構を示すとともに、無関心点の概念にもとづき、レファレンス質問の生成から図書館員による回答の提供にいたる機構を示した。

いま、社会は、中井のいう「印刷される論理」のうえに、「インターネットの論理」がおおいかぶさろうとしている。中井は、こうした現代社会の状況を見て、どのような論理を構成し、社会機構の特徴を析出し、インターネット時代の図書館の在り方を捉えるうえで有効な枠組みを提示するのであろうか。中井が提示した「委員会の論理」の発展的理論構築は、今に生きる我々の手に委ねられている。

謝辞：本稿は、2019年度の在外研究の成果であり、カリフォルニア大学バークレー校に訪問研究員として滞在中に執筆したものである。在外研究の機会を与えていただいた明治大学ならびに訪問研究員としてカリフォルニア大学バークレー校に受け入れていただき、中井正一の著作を取り上げるきっかけを与えていただくなど、種々のご支援を賜った Michael Buckland 名誉教授に心より感謝申し上げます。

注・引用文献

- 1) 中井正一。「委員会の論理——一つの草稿として」久野収編『中井正一全集 1』, 美術出版, 1981, p.46-108.
- 2) 馬場俊明。『中井正一伝説：二十一の肖像による誘惑』ポット出版, 2009, p.290-307.
本書の第五章「真理はわれらを自由にする」のなかの「母に相談して」の部分において、国立国会図書館設立時期に、参議院側から中井館長案が出されたが、紆余曲折を経て、衆議院側候補の金森徳次郎が館長に就任し、中井は副館長に据えられた経緯が記述されている。
- 3) 長田弘。「解説」長田弘編『中井正一評論集』岩波書店, 1995, p.405-406.
- 4) 後藤嘉宏。『中井正一のメディア論』学文社, 2005, 542, 19, 5p.
- 5) 佐藤晋一。『中井正一・「図書館」の論理学』近代文芸社, 1992, 275p.
- 6) ヴィンデルバント。『否定判断論』[*Beiträge zur Lehre vom negativen Urteil*] (哲学論叢 4) 枝重清喜訳, 岩波書店, 1928, 45p.
- 7) 中井 1) p.46-108.
- 8) 馬場 2), p.141.
- 9) 中井 1), p.98.
- 10) Reinach, Adolf. *The Apriori foundations of the civil law; along with the lecture "Concerning phenomenology"*. Edited by John F. Crosby. Ontos, 2012, 191p.
- 11) 中井 1), p.69-72.
- 12) 中井 1), p.70-72.
- 13) 中井 1), p.70.
- 14) 中井 1), p.70-71.
- 15) 後藤 4), p.160-214.
- 16) コジューヴェ, アレクサンドル。『ヘーゲル読解入門—『精神現象学』を読む』, 上妻精, 今野雅方訳, 国文社, 1987, p.16.
- 17) 後藤嘉宏は、前掲 4)の著作のなかで、中井の媒介概念に

ついて「メデイウムとミッテル」という二つの概念をもちいて論じている。

- 18) 中井 1), p.71-72.
- 19) 中井 1), p.72.
- 20) 中井 1), p.72.
- 21) 中井 1), p.96-97.
- 22) 中井 1), p.96.
- 23) 中井 1), p.96.
- 24) ヴィンデルバント 6), 45p.
- 25) Dewalque, Arnaud. "Windelband on Beurteilung" In: Maria van der Schaar, editor. *Judgement and the epistemic foundation of logic*. Springer, 2013, p.86.
- 26) ヴィンデルバント 6), p.15-16.
- 27) Dewalque 25), p.97-98.
- 28) Dewalque 25), p.97-98.
- 29) Dewalque 25), p.97.
- 30) ヴィンデルバント 6), p.33.
- 31) ヴィンデルバント 6), p.32-33.
- 32) ヴィンデルバント 6), p.32-33. なお、引用文中の最後の傍点部分は、中井が「委員会の論理」において引用していない箇所であるが、問いの生成と要求との関係を述べた重要な部分であることから掲載した。なお、この部分は引用箇所 30)で既に取り上げたが、これが無関心点の文脈で登場していることを明示するために再掲した。
- 33) 中井正一。「発言形態と聴取形態ならびにその芸術的展望」久野収編『中井正一全集 1』, 美術出版, 1981, p.261. 本論文は、『哲学研究』(京都大学哲学科, 京都哲学会) 1929年2月号に発表された論文の再録である。
- 34) Taylor, R.S. "Question-negotiation and information seeking in libraries," *College and Research Libraries*, v.29 no.3, May 1968, p.178-194.
- 35) “∧”は論理積を表す演算子, “¬”は否定を表す演算子である。
- 36) 中井 1), p.78-79.